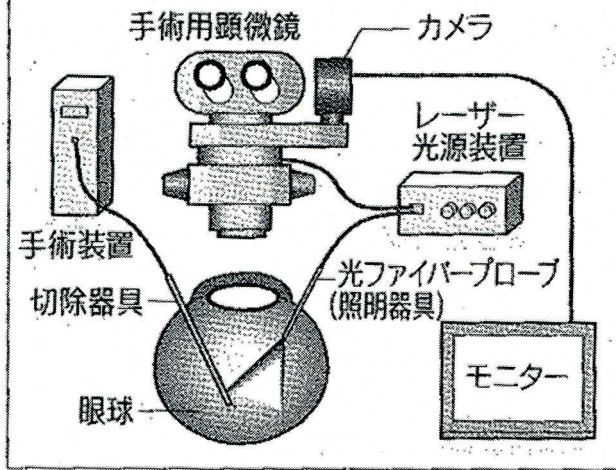


大分大と西日本電線が開発する装置のイメージ



目の手術時、眼底“生中継”

西日本電線・大分大
実用化へ装置開発

西日本電線は大分大学と共同で、目の手術中に眼底の病変をリアルタイムで把握できる装置の開発に乗り出した。2012年夏をめどに完成させて、臨床試験を経て実用化を目指す。手術の精度を高めるのに役立つほか、手術の間短縮により患者の負担も減らすことができる。

西日本電線は情報通信用の光ファイバーの加工ノウハウ

患者の負担軽減に一役

を活用、今回の共同研究で医療分野への進出を狙う。

装置は、手術中に眼球内に光ファイバーを使った微細な照明器具（プローブ）を挿入し、血管の様子が分かるように注射した造影剤に対応したレーザー光を照射する。手術用の顕微鏡で、眼底の疾患部をリアルタイムで観察できる仕組み。

大分の井上高教・工学部准教授）という。

装置は、手術中に眼球内に光ファイバーを使った微細な照明器具（プローブ）を挿入し、血管の様子が分かるように注射した造影剤に対応したレーザー光を照射する。手術用の顕微鏡で、眼底の疾患部をリアルタイムで観察できる仕組み。

基本技術は大分大学医学部と工学部が開発した。写真を使った診断画像に比べて「手術の精度を高められる」（大

硝子体手術と眼底手術を2回に分けて行っていた。新技術を使うと両手術を連続して行うことができる。出血や混濁を併発し、疾患部をみることもできず、

性症によって眼底の血管に障害が生じると、網膜剥離（はくりに）を起し失明する恐れがある。これらの患者の多くは、眼球の硝子体（しょうし）の出血や混濁を併発し、疾患部をみることもできず、